

第2節 江戸川乱歩の登場と作品概観

1. 江戸川乱歩の登場

江戸川乱歩は大正時期から昭和時期にかけての「探偵小説」作家として活躍していた。中島河太郎は『推理小説展望』で、乱歩が「探偵小説」界に登場してから、「多くの作家が生まれ、文壇の一翼に推理小説の基地を設けるにいたった原動力となった。ここに日本の近代推理小説史の第一ページがあらためて開かれたとっていい¹」と評価している点から、江戸川乱歩が日本近代「探偵小説」の発展史において非常に重要な存在であることがわかる。そのために、この一節ではまず乱歩の生い立ちと作品概観を整理する。

伊藤秀雄の『昭和の探偵小説 昭和元年―二十年』の「第一章 江戸川乱歩らの活躍」では、乱歩の出身について次のように説明している。

明治二十七年十月二十一日、三重県名張町（現在は市）に生まれた。父は当時、同県名賀郡書記。明治三十六年、九歳の時、大阪毎日新聞連載の、菊池幽芳訳「秘中の秘」を、母に話して貰ったのが、探偵小説に興味を覚えたはじまりで、学芸会にその物語を話した。

その後、黒岩涙香や押川春浪の著作を耽読、大正元年八月上京、早稲田大学予科の編入試験に合格。（中略）

十一年に「二銭銅貨」を執筆して、「新青年」主筆森下雨森に送り、翌十二年四月の同誌に掲載され、創作推理小説が盛況を呈する機運を生む。続いて、「一枚の切符」（大正十二年、新青年）、「双生児」（大正十三年、新青年）、「D坂の殺人事件」（大正十四年、新青年）、「心理試験」（同上）など斬新なトリックによる短編で世評を集めた。（中略）

その後、しばらく筆を絶って発表した「陰獣」（昭和三年夏季増刊―十月、新青年）は戦前の乱歩作中第一級に位する傑作とされている²。

以上の引用にあるように、乱歩は明治時代有名な欧米「探偵小説」の翻訳家・黒岩涙香と空想科学的な冒険小説作家・押川春浪の作品を愛読し、その影響も

¹ 中島河太郎『推理小説展望』、双葉社、1995年、p.68。

² 伊藤秀雄『昭和の探偵小説 昭和元年―二十年』、三一書房、1993年、pp.27-28。

あって、乱歩の作品は空想的・非現実的なストーリーをリアリティーのある描写で書き上げ、独特な雰囲気を出している。

そしてデビュー作の「二銭銅貨」を経て、「一枚の切符」「D坂の殺人事件」など好評作を次々に発表した乱歩について、中島は次のように論じている。

乱歩が推理小説確立の功績を独占しているのは、つづいて「心理試験」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」（一九二五）、「陰獣」（一九二八）と好評作を生んだ点になる。（中略）

一方潤一郎の探偵趣味的作品に傾倒していた彼は、「赤い部屋」（一九二五）、「鏡地獄」（一九二六）、「芋虫」「押絵と旅する男」（一九二九）などの怪奇幻想的作品があった。大正末期はまだ今日ほど探偵文壇が垣の内にたてこもることもなく、一般文壇との交流が行なわれた³。

この引用に言及されている潤一郎は谷崎潤一郎のことである。中島が言うように、「乱歩は純粹理知文学である推理小説の先駆者の榮譽をになったばかりでなく、潤一郎、春夫の怪奇幻想文学の継承者でもあった⁴」のである。「すなわち乱歩は浪漫文学の継承者と理知文学の創始者としての役割を果たした⁵」という中島の指摘通り、乱歩の独自の作風が高く評価されているのである。

江戸川乱歩は「探偵小説」の評論家としても活躍していた。乱歩自身は欧米「探偵小説」を研究し、「探偵小説」の定義や本質などについての論考を多く発表した。例えば「探偵小説」の類別や、本質に関する三要素などの論は、日本における「探偵小説」の展開に大きく貢献した。このように乱歩が残した大量な「探偵小説」評論は「探偵小説」研究の重要な文献であることがわかる。乱歩は「探偵小説」の発展を論じる上で、言及せねばならない最も重要な作家の一人である。

2. 乱歩の「探偵小説」観

第1節では、乱歩の「探偵小説」の定義について簡略に紹介したが、乱歩の評論集『幻影城』の中には、さらに詳しく8条の解説がなされている。ここで

³ 注1 前掲書参照、pp.68-69。

⁴ 注1 前掲書参照、p.69。

⁵ 注1 前掲書参照、p.69。

は8条からいくつかの要点を抜き出し、乱歩の「探偵小説」観を論じることとする⁶。

- (1) 先ず、そこには小説の全体を貫くような秘密がなければならない。
- (2) 探偵小説の興味の半ばは犯罪そのものから来ると云ってもよい。犯人が死にもの狂いの智慧をしばって考え出した犯跡隠蔽の欺瞞を、探偵の立場に立った人物が、証拠によって論理的にあばいて行くのだが、犯人は多くの場合、小説の最後まで隠されているので、直接その性格や心理を描くことは出来ないけれども、探偵の側が一步一步推理を進めて行くに従って、犯人は刻々に焦慮し、恐怖に戦き、或はデスペレートな抵抗を試みるなどの心理が、紙背からまざまざと感じられるような作品を上乗とする。
- (3) その秘密は出来るだけ難解であることが望ましい。(中略) 私は探偵小説の面白さの条件として、出発点に於ける不思議性、中道に於けるサスペンス、結末の意外性の三つを挙げる。(傍点原文)

以上の引用を見ると、乱歩はまず「探偵小説」の不可欠な要素は「秘密」にあると考えている。犯罪に関する難解な謎の設定や、探偵の謎解きの過程、そして犯人の細かな心理描写などを描く「探偵小説」を「上乘」であるとする。この点から見れば、乱歩が理想とする「探偵小説」はトリックを論理的に描くことのほかに、作中人物の心理描写なども重要であることがわかる。

そして乱歩はさらに3条目で、「探偵小説」の構成における「不思議性」「サスペンス」「意外性」の配列の重要性を強調している。この三要素は本論文の研究目標の一つである構造分析を論じる際の、作品の完成度を検証する重要なポイントである。

最後は8条目の要点であるが、乱歩の「探偵小説」観がうかがえるものとして注目すべきである。

探偵小説は一つの文学である。秘密が如何に深く隠されていようとも、その解決が如何に巧みであろうとも、文学として劣ってはいは、その価値

⁶ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』、光文社、2003年、pp.22-23。

を半減することを注意しなければならない。同時にまた、如何に文学的手法に優れていても、上記の謎文学特有の条件が充されない場合は、やはりその価値が半減されるであろうことは云うまでもない。この意味に於て、探偵小説は科学と芸術の混血児の如きものであり、そこに探偵小説の文学上の極めて特殊な地位がある⁷。

以上の8条目において、乱歩は「探偵小説」における論理的要素と文学的技巧の両方が不可欠な要素であると考えている。さらに「探偵小説」は純文学なのか、それとも大衆文学なのかについてその考えを次のように述べている。

小説を純文学と大衆文学に二大別し、探偵小説はその後者に属すると極めてしまうことは出来ない。探偵小説というジャンルはそういう区別とは別個のものである。随って、探偵小説の内に純文学的なものもあり得し、また大衆文学的なものもあり得ると考えるのが正しいのだと思う⁸。

「探偵小説」というジャンルは単純に純文学や大衆文学に分けるべきではないと説いている。「探偵小説」は大衆文学に分類されるのが普通であるが、乱歩は「探偵小説」における文学性を見い出そうとして、自分の作品で芸術的要素をいろいろと工夫したのである。

3. 乱歩作品の概観

江戸川乱歩は大正12(1923)年、『新青年』に「二銭銅貨」を発表し、文壇デビューを果たした。初期は欧米の「探偵小説」に強い影響を受け、「D坂の殺人事件」「心理試験」など本格「探偵小説」の作品を世に送り出した。

乱歩は次に「赤い部屋」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」など奇抜な着想と幻想的な不思議性を持つ作品を発表し、その独自の作品の特質を示している。その後、乱歩は「パノラマ島綺譚」「鏡地獄」など怪奇的・幻想的な要素の強い作品を書いた。しかし、自作「一寸法師」の出来に嫌悪し、一年数ヶ月休筆し、旅に出た。休筆明けに発表したのが「陰獣」であるが、本作品は好評を博し、乱歩のもう一つの頂点を示す作品となったのである。

⁷ 注6前掲書参照、p.26。

⁸ 注6前掲書参照、p.26。

推理作家の九鬼紫郎は『探偵小説百科』において、乱歩作品の特色について、次のように説明している。

一人二役、ドンデン返しの構想が、彼の探偵小説にはおびただしく現われる。彼は機械トリック、物理トリックをきらい、〈人間に関するトリック〉〈心理トリック〉を好み、これが特長だといいきっても、言いすぎとは思えないくらいである。『陰獣』『パノラマ島奇談』『湖畔亭事件』『一人二役』『双生児』『何者』の諸作品は、いずれも〈一人二役型〉の探偵小説である。(中略)

ドンデン返し、逆転トリックもまた、乱歩の好んで用いる手法である。処女作の『二銭銅貨』がそうであり、『一枚の切符』『二廃人』『赤い部屋』『百面相役者』『一人二役』『人間椅子』その他の作品に、この手法がつかわれ、ただの逆転ではものたりず、しまいになると二重、三重のドンデン返し、逆転のまた逆転という壮観を呈してくる。これでもか、これでもかというねちっこさに、読者は圧倒されずにはいないのである。傑作『陰獣』はその好例であり、作者自身をトリックに利用したりして、大きな成功をおさめた⁹。

九鬼紫郎の説明にあるように、不思議な着想を持つ作品として成功した「人間椅子」「屋根裏の散歩者」や、ドンデン返し、逆転トリックの意外性が強い作品、例えば「二銭銅貨」「陰獣」などの乱歩作品が人気を博した。繊細な犯罪心理と心理ドラマの描写、そして感覚表現なども乱歩の「探偵小説」の文学性を高める重要な要素である。

乱歩の「陰獣」は高く評価された作品であるが、九鬼紫郎の解説によると、乱歩が「陰獣」を発表した後、本格「探偵小説」の世界からしばらく離れ、「蜘蛛男」(昭和3年8月)「猟奇の果」(昭和4年1月)など当時の読者の好みに応じた、娯楽性の高い長編「探偵小説」を十年にわたり書き続ける¹⁰。そして翻案性の高い作品として「緑衣の鬼」(昭和10年1月)、「幽鬼の塔」(昭和10年4月)などの作品と、明智小五郎と小林少年をはじめとする少年探偵団が活躍する作品「怪人二十面相」などの少年向けの作品を大量に発表した。

⁹ 九鬼紫郎『探偵小説百科』、金園社、1975年、p.59。

¹⁰ 注9前掲書参照、p.60。

これらの娯楽性の高い通俗長編は「陰獣」以前の作品に比べると、論理的推理に欠陥が多く、また謎の難解度も低い。しかしその内容は娯楽性が強く、当時ではベストセラーにもなった。また少年向けの「探偵小説」は読者の年齢層の拡大に大きな役割を果たしたこともまた事実である。

戦後の乱歩は推理小説研究において、『幻影城』『続・幻影城』など推理小説の評論集を著し、研究の分野においても成果を上げている。また推理小説の新人作家を育て、日本推理作家協会の設立にも尽力した。そして江戸川乱歩賞は日本最初の推理小説賞となったのである。以上の乱歩の足跡を見ると、彼の登場は日本の推理小説の発展において最も重要な一環と言えよう。それに推理小説の分野だけでなく、乱歩独自の作風も怪奇・幻想的な文学に大きな影響を与えている。

